

九州畑作地帯農業経営実態調査報告 (第1報)

中川 龍一・沢辺恵外雄・松永俊雄

九州農業試験場

Nakagawa, R., Sawabe, E., & Matsunaga, T. Report on survey of farm management in upland region in Kyushu (I)

九州の農業地帯を農業経営の立場から大別すれば、凡そ次の如く区分することが出来る。

1. 北部水田地帯 福岡、佐賀縣を中心とし、九州に於ては比較的進んだ段階にある。
2. 中部畑作地帯 熊本縣にあり、之は又、後述の如く二つに分けて考えられる。
3. 南部畑作地帯 鹿児島縣南部に所在する純畑作地帯であり、技術的に後進的である。

第1表 九州各縣畑地面積 (22.8.1. センサス)

縣名	耕地面積 町	畑地面積 町	畑地	
			耕地	九州畑地
			%	%
全 國	5,011,689	2,162,074	43	—
九 州	661,779	269,479	41	100
福 岡	117,306	19,913	17	7
佐 賀	60,997	10,971	18	4
長 崎	72,036	42,398	58	16
熊 本	123,366	52,597	43	20
大 分	75,473	24,908	34	9
宮 崎	79,646	36,393	46	13
鹿 兒 島	132,955	82,299	62	31

中部畑作地帯は、九州の全畑地面積の20%を占めるのであるが、之は阿蘇山外輪一帯の高冷畑地帯と、熊本縣菊池、飽託兩郡をその地域とする低暖畑地帯とに分けられ、後者の前者に比較しての特徴は、主として次の如くである。

(1) 気候が温暖であること。(2) 経営内部に草地を有しないこと。随つて地力の低下を防ぐ為の堆肥の生産に就いての与件が異なること。(3) 市場(消費都市)に近接していること。等である。之等の立地条件の下に於て、一般にこの地方の農業技術の段階は低く、生産力も亦低位であるとされるのであるが、果して然らば、この地帯に於ける農業技術的な段階を一步前進せ

しめるためには、農業経営は如何にあるべきかを究明することが、この調査の目的である。今回はこの地帯の主要な一部分をなす西合志村に就いて、主として、作物の導入状況、作付の体系に関して得た資料の一部を報告する。

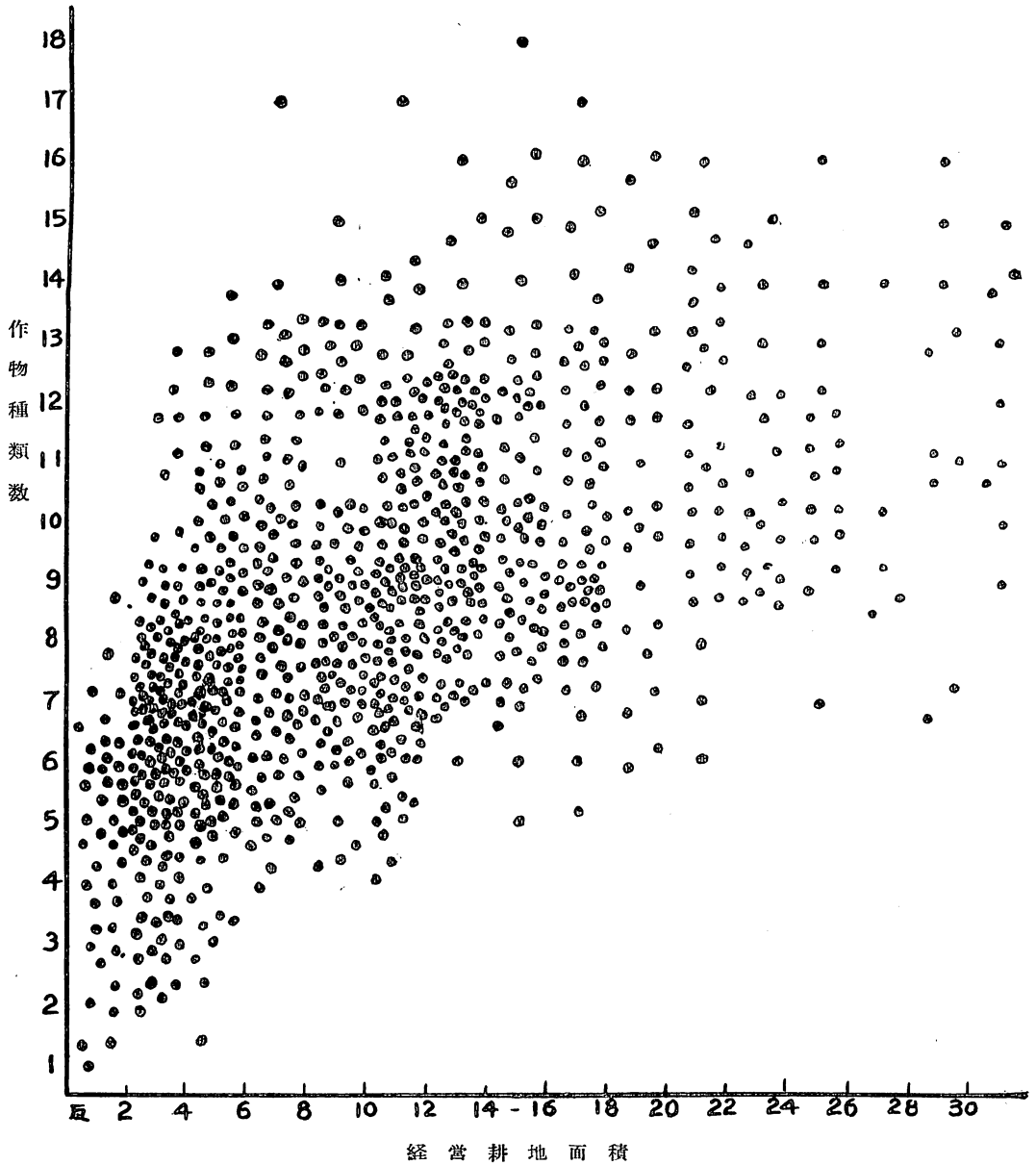
1. 作物の導入状況

全村941戸の農家に就いて、8.1センサスの資料に基いて、経営面積の広さによつて栽培せられる作物の種類、その数がどの様に変化するか、即ち一農家に於て栽培される作物の種類及び数が、経営面積と如何なる関係にあるかを見た。第1図によつて、経営面積の広狭別の各階層に属する各農家の栽培作物種類数を見れば、作物種類数は、経営面積の拡大に伴つて増加する傾向にあるが、兩者の間には、強い相関々係はなく、1戸当経営面積の全村平均である1町2反と、1戸当作物種類数の平均である9種との交点附近に大きく集積を見せている。

第1図の如く941戸の農家に於て18種類の作物が栽培されているのであるが、その中80%以上の農家が栽培する作物を一応主要作物とすれば、甘藷、大豆、小麦、稗麦、陸稻、粟の6種である。然しながら、之等6種の作物全部を、同一年内に作付する農家は、平均1戸当以上の面積を経営する農家であつて、平均以下の農家に於ては、その一或は二を欠いているのである。次に是等の作物が、経営面積と如何なる関係にあるかを見れば、各作物によつてその傾向は異なるが、類型的には、多作物型と夏作物型とに類別出来よう。

即ち、前者に属するものには稗麦、小麦があり、何れも経営面積の増大と栽培面積の増加とは、相当程度の正相関の傾向にある。之に対して後者は、経営面積は拡大しても栽培面積の顕著な増加は行われず、各農家の栽培面積が或る限界を保つてゐる様である。その代表的なものとして、大豆、粟があげられ、次いで陸稻があげられる。甘藷も亦この類型の外ではないが、

第1図 経営耕地広狭別栽培作物種類数



少々多作物型に近く、中間的傾向が見える。この様な傾向が如何なる要因に基くものであるかは、更に調査研究を要する問題であろう。以上の代表的なものについて図示すれば第2図以下の如くである。尙各図の最下段は、作付しない農家数を示すが、之については、甘藷と他作物との比較に於て若干の相異がある。甘藷

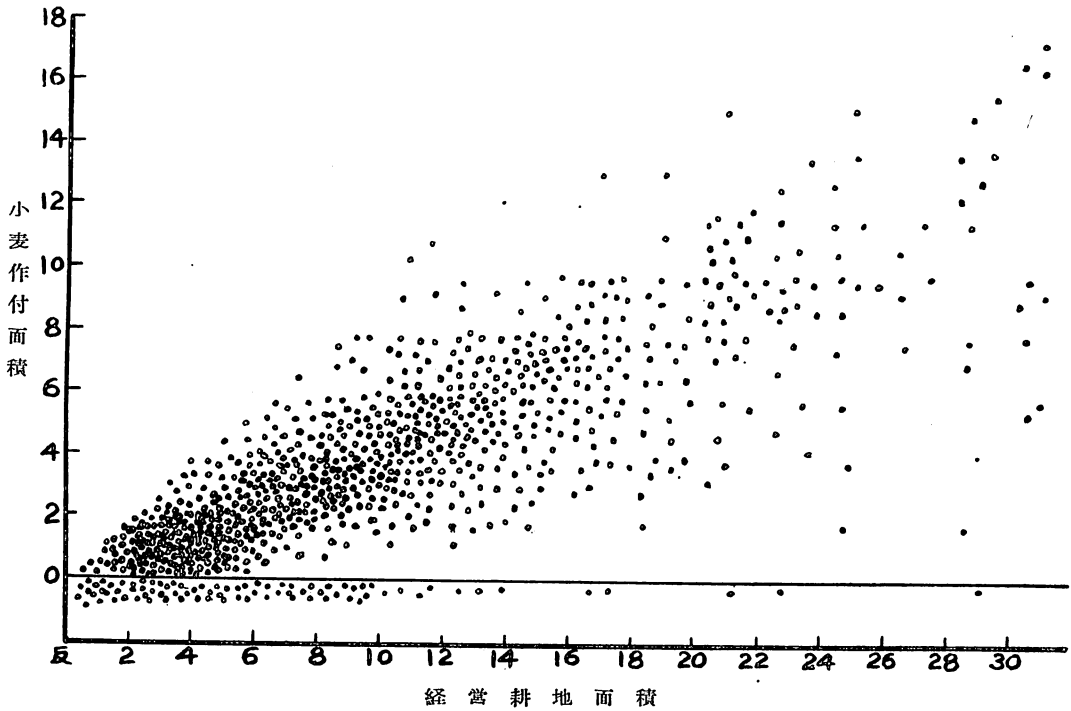
無作付農家は、階層による分散が他作物程顕著ではないと云えよう。

2. 作付順序

次に、これらの作物の作付順序を調査する為に、標準的な農家3戸を抽出して、各農家の全耕地に就い

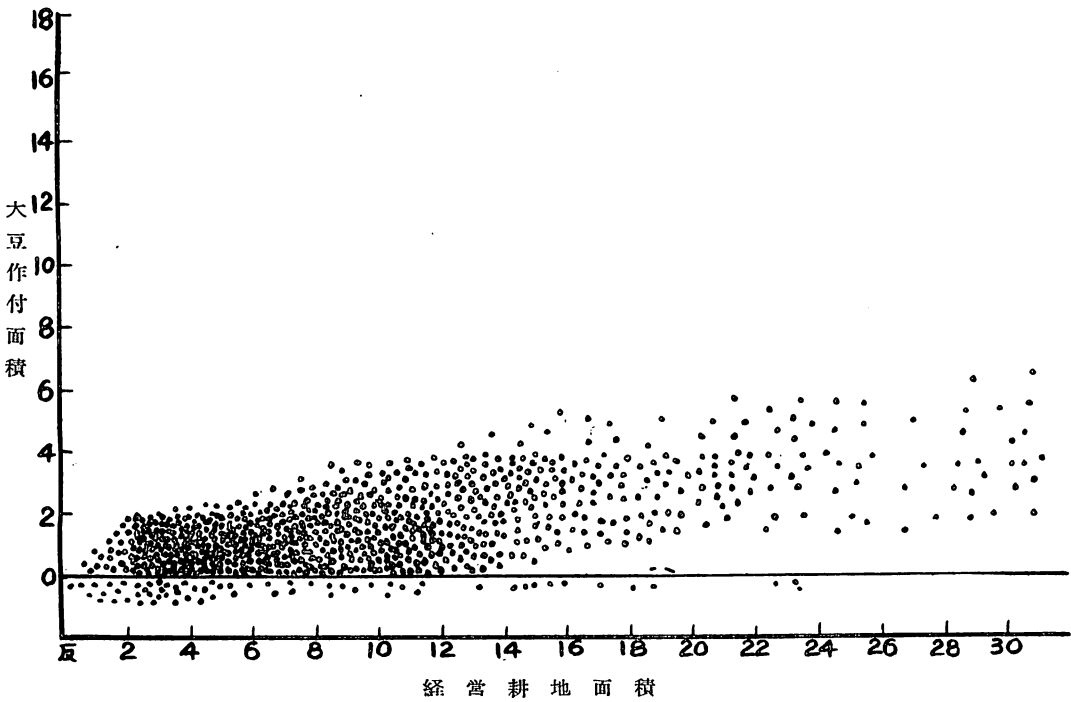
第 2 図

經營耕地広狭別小麦作付面積



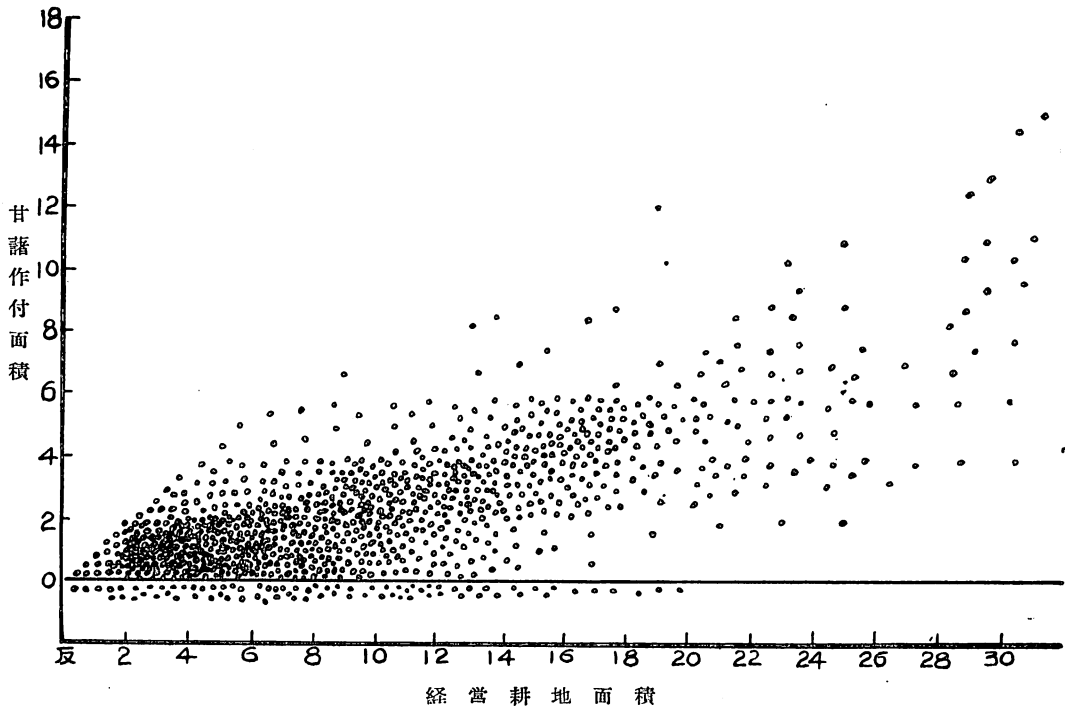
第 3 図

經營耕地広狭別大豆作付面積



第4図

経営耕地広狭別甘藷作付面積



第2表 主要作付順序の型

作付順序	適用枚数		適用面積	
	実数	割合	実数	割合
小麦—甘藷—稈麦	18	13%	27.5	15%
稈麦—大豆—粟—小麦	14	10	22.0	12
小麦—甘藷—小麦	10	7	15.8	8
小麦—陸稻—稈麦	7	5	15.8	8
稈麦—甘藷—小麦	7	5	12.1	6
稈麦—陸稻—小麦	5	4	8.4	5

て、畑1枚毎に22年多作～25年多作の作付順序の聴取

を行つた。その結果、8種類の多作物に続いて、58種の作付順序の型が現れた。その中、比較的大面積を占めるものは第2表の如くである。

作付順序は、何れの場合も地力消耗度の強い型であり、之に対して、農家が行つている地力維持の爲の有機物の補給は、反当堆肥250貫前後の施用のみであり、火山灰土の所謂、黒ボク土壤に於て持続的に地力の低下を防止することは、極めて困難な現状である。かゝる地帯に於て如何なる経営組織と方法とをとり、持続的の最高収益を確保するかは、最終の研究目的であり、我々の調査もその方向に集約せられるのである。